14. 過去5年間の当科における悪性腫瘍切除後の再建法の推移

林　建一，椎葉正史，宮川昌久
（千大）

1998年から2002年10月の間に行った再建手術患者126人について検討した。年次別再建症例数は増加傾向にあった。以前はD－P皮弁・大胸筋皮弁といった有茎皮弁を主として行っていたが，2000年からは前腕皮弁・前外側大腿皮弁といった遊離皮弁の導入により，手術時間および術後入院期間の短縮を実現させた。その他，広背筋皮弁・腹直筋皮弁・胸鎖乳突筋皮弁を用い，皮弁の選択幅が広がり適材適所の再建が可能となった。

15. 口腔悪性腫瘍術後の機能評価

阿部洋三，椎葉正史，宮川昌久
（千大）

舌癌再建術後の23症例に対する検討で，発語明瞭度では100音節・直音・拗音ともにD－P皮弁・前外側大腿皮弁がほぼ同等で，前腕皮弁が15％程度良好であった。アンケート調査では，日常会話に不自由を生じた症例はなかった。また母音および後続母音「e」が「i」音化していた。嚥下機能検査ではD－P皮弁・前外側大腿皮弁で良好であったが，前腕皮弁はしなやかである反面若干機能が低下していた。しかし日常面での不自由はなかった。

16. 下顎骨切除後の再建法に関する検討

齋藤謙悟，宮川昌久（千大）

当科で1995年4月以降治療した口腔癌下顎骨合併切除後53例に対して検討を行った。年齢は60，70歳代に多く，下顎歯肉が44例と大半を占め，T4が約半数であった。再建法は一次縫縮が17例，皮弁再建が36例で，半側切除，オトガイ部切除施行後であっても適切な皮弁とボリュームの選択により十分な形態的，機能的回復が可能であった。一次再建で軟組織のみを，二次再建で硬組織再建を施行し良好な結果を得た。

17. 外科処置が必要だった顎関節脱臼の1例

武井雅子，中津留誠（千大）

陳旧性顎関節脱臼は長期間顎関節脱臼を放置することにより生じる。今回統合失調症患者の低Na血症による全身痙攣発作により転倒し，その際に顎関節脱臼を起こし陳旧性へ移行した症例を経験した。徒手整復術を全身麻酔下においても施行したが整復不可能だったため，下顎骨下方牽引による観血的顎関節整復術を施行した。術後、顔面神経麻痺や顎強直症も起こすことなく良好な結果を得た。

18. 片側性に顎関節突起の変形，増大を認めた2症例

田代圭祐，吉野智晴（小見川総合）

症例：71歳男性。主訴：右顎関節の変形。現症：顔貌左右非対称で右側顎関節部に腫脹を認めた。開口制限を認め，開口時下顎正中は右側に偏位した。3DCTにて病変は右側下顎頭に限局し，内外側，上方，前方に分葉状に隆起していた。臨床診断：骨腫瘍疑い。症例：3歳男児。主訴：開口障害。現症：顔貌左右非対称で右頬部に腫脹を認めた。3DCTにて関節突起，筋突起に肥大を認めた。臨床診断：右側顎関節突起・筋突起肥大。

19. 習慣性顎関節脱臼に対する上関節腔自己血注入療法

高橋喜久雄，石上享嗣，田中千恵子
山木　誠　（船橋中央）

顎関節の習慣性脱臼は，脱臼が頻回な場合はその処置に難渋することも多い。今回われわれは，脱臼を繰り返し，関節制動術では制御しきれなかった66歳の男性患者に対して，両側の上関節腔および関節包周囲に自己血を注入し良好な結果を得たので報告した。本療法は切開などの必要が無いため患者への侵襲が少なく，繰り返し行うことが可能で，比較的十分な脱臼の抑制効果が期待できることから有用であると考えられた。

20. 顎関節部に発生した滑膜肉腫と考えられる1例

川畑彰子，武川寛樹（千大）

症例は67歳，男性。右顎関節部の膨隆を主訴に来院した。試験切除では瘢痕組織と診断されたが，画像上著明な骨吸収像を認めるなど臨床的に悪性腫瘍を強く疑ったため，頸部郭清術および下顎枝部切除術を施行した。病理組織検査では，腺管構造を示す上皮様腫瘍細胞を主に認めたため腺癌も疑われたが，発生部位，形態，二相性構造を示す組織像から滑膜肉腫と考えた。術後約1年経過した現在再発等の所見は認められていない。

21. 若年者口腔癌の臨床病理学的検討

金沢優美，佐々木忠昭，岡田鈴人
成川公貴，今井　裕（独協医大）

若年者口腔癌患者の臨床病理学的検討を行ったので報告した。対象は，過去24年間に当科で一次治療を行った40歳以下の口腔癌12症例のうち，扁平上皮癌10例で